

大陸倭語と日本語の起源

日時:2023年9月28日

グローバルフロア企画第17回

場所:本学神田キャンパス10号館10202教室

伊藤英人

ごあいさつ

本日はわざわざこの会に足を運んでいただきどうもありがとうございます。

自己紹介に先立ち、発表の形式についてお話しさせていただきます。

通常、こうした発表は、パワーポイント等で行うことが多くなりました。私も学会や講演、また講義等でも時々パワーポイントで発表することはございます。

ただ、パワーポイント資料の発表は、私が聴衆として聞く立場でもそう感ずるのですが、その時は理解できた気がしても、あとでよく分からなくなったり、また、発表者としても、発表が文章として後に残りません。そう思っておりましたところ、今回主催者の土屋先生の方から、文章としてあとで掲載できるような形での発表が望ましいとのお話を頂き、大いに共感し、このような発表文資料配布という古式ゆかしき(?)形式でお話をさせて頂きたく存じます。

では初めに自己紹介からさせていただきます。私は、専修大学に特任教授としてつとめ、本学では、コリア語、世界の言語と文化(コリア語)、言語文化研究(アジア)、地域研究(アジア)、テーマ研究(アジア)といった授業を担当しております。

非常勤講師として、青山学院大学で「中国語」を、明治大学で「朝鮮語(文学部)」「韓国語(学部間共通外国語)」、東京大学で「韓国朝鮮語」、早稲田大学で「朝鮮半島文化研究」を担当しております。

「コリア語」「朝鮮語」「韓国語」「韓国朝鮮語」というようにいろいろな名前がありますが、これらは、「全く同一の言語の異なる名称」です。

研究としては、私は永年朝鮮半島の言語に中国語が与えた影響の歴史を研究してきました。2000年代から古代朝鮮半島諸言語について論文を発表するようになりまして、国立国語研究所やアジア・ア

フリカ言語文化研究所の共同研究員として古代朝鮮半島言語について研究発表をいたしました。

2016年度に国際日本文化研究センターの共同研究「日本語の起源はどのように論じられてきたか」に共同研究員として参加し、そこで、日本語起源論の一つの仮説を出しました。この共同研究の成果は次の書籍で公刊されております。

長田俊樹編『日本語「起源」論の歴史と展望:日本語の起源はどのように論じられてきたか』

三省堂2020年

<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dict/ssd36508>

2018年度に「ヤポネシアゲノム」プロジェクトという、遺伝学の研究者を中心に、考古学、言語学の研究者が参加したプロジェクトの研究協力者として日本語起源論に係り、その後、数編の論文を発表しました。日本語起源論に関する私の論考等は末尾に一覧として示しました。上記、三省堂のもの以外はインターネットでpdfをダウンロードできますので、よかったですらご覧ください。

題名の説明

本日のタイトルは「大陸倭語と日本語の起源」となっています。

「大陸倭語」については後ほど説明するとして、「日本語」と「起源」が問題になりますが、まず「起源」の方から説明します。

「○○語の起源」は、多くの言語において「ある程度まで」は説明が可能です。地球上の諸言語は何らかの「語族」に属していて、それらの共通祖先を「祖語」と言います。「語族」は言語のグループであって、ヒト集団の名称ではありません。

例えば、英語はインドヨーロッパ語族ゲルマン語派西ゲルマン語群に属する言語で、かなり多くの単語や文法要素について「インドヨーロッパ祖語」までは遡ることができますが、その先は杳として闇の中にあります。ですから正確を期して言えば、「〇〇語の起源」は究極的には「不明」というしかありません。一般に「〇〇語の起源」に関する研究は、祖語までの遡りとその後の分岐の詳細を明らかにすることにあります。そうした分野を研究する言語学の領域を比較言語学と言います。

次に「日本語」です。皆さまにとって「日本語」は自明の概念であるかも知れません。

日本語は、比較言語学的に言えば、「日琉語族 Japonic language family」の一つの語派です。

日本列島には、日琉語族とアイヌ語族という二つの全く異なる語族が話されてきました。

日琉語族は、日本語派、八丈語派、琉球語派に分かれます。八丈語は、八丈島と青ヶ島で話される言語です。

琉球語派はさらに北琉球語群と南琉球語群にわかれ、前者には奄美語、沖縄語、後者には宮古語、八重山語、与那国語が属します。

これらの言語は相互に全く通じません。ただ、近年は共通語化のため、日本語を除く日琉語族の諸言語は全て消滅の危機にある言語です。2009年にこれらの日琉諸語とアイヌ語がユネスコから危機言語指定を受けました。このことについては以下をご参照下さい。

文化庁「消滅の危機にある言語・方言」

https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/index.html

一例として日琉諸語のいくつかの単語の語形と、日琉祖語(あとで説明します)を示します。カタカナは近

似値です。

これらの語形を見ても、相互理解がほぼ不可能な(たまに似た単語がある)言語どうしてあることがわかります。「基本的に何を言っているか分からないがたまに似たような単語がある」というのが「同系言語(起源を同じくする諸言語)」である特徴で、多くのヨーロッパ語どうし、例えばフランス語とポルトガル語、チェコ語とロシア語などはそうした関係にあります。

慌てて付け加えておきたいのは、「聞いていて時々似た単語がある韓国語も日本語の同系言語ではないのか」という疑問が生じるのでは、ということへの答で、その答は「否」です。

韓国語の単語が日本語の単語に似て聞こえるのは、100%「借用語」のせいです。大多数は漢語(多くが日本製漢語)と西欧語借用語(多くが英語借用語)が似ているだけです。例えば、「酸素マスクが」という名詞句は韓国語で「산소마스크가 산소マスク가」と言い、ほぼそのまま理解できます。しかし「酸素」は日本製漢語を韓国語が受け入れた借用語、「マスク」は英語からの借用語です。「～が」を意味する「-가」は「偶然の類似」で恰も英語のnameが日本語のnamaeと似ているような偶然です(主格助詞の-がは疑問助詞が16世紀に母音で終わる名詞の後に主格助詞として転用されたもので、日本語の「が」とは全く無関係です)。

借用語が原語に似ているのは当たり前です。ルー大柴という芸人さんは「トッダーはウェザーがベリーホットだから」のような英語借用語だらけ日本語を話すのが芸風で、この言語を「ルー語」といいます。仮に全ての日本語話者がルー語を話すようになって、日本語は英語の同系言語にはなりません。借用はあくまで借用に過ぎませんし、たぶん、英語ネイティブは「ルー語」を解さないでしょう。

上で挙げた、日本語本来の単語に相当する韓国語の語形は「人 サーラム」「月 タル」「今日 オマル」

語例	日琉祖語	日本語	沖縄語	宮古大神語	与那国語
「人」	*ピト *pitə	ヒト hito	(ッ)チュ (t)ʃu	フストゥ pstu	トゥッ 'tu
「月」	*トゥクイ *tukui	ツキ tsuki	チチ tsifi	クスクス ksks	ツティー 'ti:
「今日」	*ケプ *kepu	キョー kjo:	チュー ʃu:	キー ki:	スー su:
「草」	*クツァ *kutsa	クサ kusa	クサ kusa	フファ ffa	ツツァ 'tsa
「雨」	*アメ *ame	アメ ame	アミ ami	アミ ami	アミ ami

「草 プル」「雨 ピ」であって、日琉諸語間のような語形の類似を示しません。

「1~10」の数詞も、沖縄語では、「ていーち、たーち、みーち、ゆーち、いちち、むーち、ななち、やーち、くぬち、とー」で、きいたら数を数えていることは日本語話者にはすぐわかりますが、韓国語では「ハナ、トゥール、セーツ、ネーツ、タソツ、ヨソツ、イルゴフ、ヨドル、アホフ、ヨール」で全然違います。

韓国語は、「韓語族 Koreanic language family」という日琉語族とは全く別の語族に属する言語です。

では、韓国語と日本語の文法はなぜあんなに似ているのか、という疑問には、今日のお話の最後の部分でお話します。

言語の古い形をどのように再建するか

上の一覧の左端、「日琉祖語」は、現存の同系諸言語及び遡り得る限り最古の文献資料を駆使して、比較言語学的手法によって「再建」されたものです。習慣的に「*（アステリクス）」を語の頭につけます。文献に出てくれば、これをつけません。

一例として、「人」を挙げましょう。

8世紀の日本語資料から、当時の奈良盆地で話されていた日本語の「人」は *fitə* であったことが知られています。日琉諸語との比較から、語頭はもともと **p* であったことが分かっています。

本土諸方言、すなわち日本語の多くでは、語頭が **p* > *f* > *h* と変化しました。「>」は比較言語学の記号で、「A > B」は「Aの語形からBの語形へと変化した」という意味に用います。日本語では平安時代には母音 /ə/ が /o/ に合流してしまったため、日本語諸方言の「人」は、「ヒト~シト」などのようになっていきます。

一方、琉球祖語では **pitu* であったと考えられています。沖縄語首里方言では「人」を *tʃu* ~ *tʃu* *fʃu* と言います。「うちなーんちゅ」「しまんちゅ」というときの「チュ」です。

琉球祖語形から現代沖縄語形までの変化は次のように説明されます。

**pitu* > **pitju* > *piʃu* (1501年) > **pfʃu* > *tʃu* ~ *fʃu* (現代沖縄語首里方言)

pitu* (ピトッ) から **pitju* (ピテュ) の変化は「順行同化 (前の音が後ろの音に影響する変化)」です。pitju* (ピテュ) から *piʃu* (ピテュ) は「テューリップ」が「チューリップ」になるような変化で破擦音化といい、多くの言語で起こっています。この語形に「*」がついていないのは、1501年にソウルで刊行されたハングル表記の琉球語会話書『語音翻訳』に「匹齋」と表記された例が現存しているためです。*piʃu* (ピテュ) > **pfʃu* (フテュ) の変化は「語中音消失」と呼ばれる現象です。日本語で「どこから」が「どっから」になるのは、*dokokara* > *dokkara* で第2音節の [o] が消失しているからです。**pfʃu* (フテュ) > *tʃu* ~ *fʃu* (フテュ~テュ) の変化は、「逆行同化 (後の音が前の音に影響する変化)」です。

音韻変化は規則的なものなので、日本語の「ヒト」は沖縄語では多く(祖語の違語に由来したり、後代の借用語を除いて)が「チュ」になります。「一壺 ひとつぼ:ちゅちぶ」「一人 ひとり:ちゅい」などがその例です。

琉球祖語 **pitu* からは、宮古語大神語の *pstu* や与那国語の *ʔtu* が規則的に説明できます。このように祖語の再建形は、その子孫の言語の語形をすべて合理的に説明できなければなりません。

このような研究をするのが比較言語学です。これからお話する「大陸倭語」についての研究もこのような比較言語学的手法で行われたものです。

大陸倭語という名称

「大陸倭語」の名称は、私が上記の三省堂の書籍で導入し、2021年11月の日本言語学会大会で私が報告した

『朝鮮半島における言語接触と大陸倭語』2022.11. 『日本言語学会第163回予稿集』354-359頁
https://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/163/handouts/ws3/W-3-1_163.pdf

という論文で正式に提案しました。その後の『日本語の研究』2023. 8. に掲載された平子達也氏による「学会展望」を読む限り、「国語学」側からの一定の認証を受けているようです。

もともと朝鮮半島の古代地名に日本語と類似した

要素が存在する事実は1907年に内藤湖南が発見して以来、100年を超す研究の歴史があります。

英語圏ではPeninsular Japonic(半島日琉語?)と称されますが、「日琉語」という名称は、前近代に日本列島に存在した「日本」と「琉球」という王朝国家名に起源する名称であり、これらの王朝の住民である話者が朝鮮半島に出かけて行って残したものではありません(逆です)。また「半島」という用語は、日本の併合・植民地期に「半島人」のような差別的用語として使われてきた経緯があります。さらに、日本語に類似した語を含む地名は、吉林省、遼寧省にも分布しているため、日本語では「大陸倭語」と称するのが妥当だと考えます。

『三国史記』地名とは

『三国史記』という朝鮮の古代史を記述した書物に出て来る地名、中でも「高句麗地名」が有名ですが、これらは757年に統一新羅の王権が、それまでの朝鮮半島各地地名の漢字表記を、中国式に(中国語ネイティブが見てもおかしくないような字面に)「改正」したものを列挙し、「旧名」と「新名」を併記した資料群です。ちなみに同じように8世紀の日本でも「无邪志→武蔵」のような国名の「好字二字」への改正が行われています。

私は「高句麗地名」とカッコつけて呼ぶのですが、その理由は、新羅による統一前の高句麗の領域と「本高句麗」とされる地名の地域が一致しないからです。統一新羅は、百済と高句麗をすべて統一したと主張しましたが、実際には今の北朝鮮の大部分は、渤海という別の国の支配下にありました。ただ、「観念的に」全国を九つの州に分け、三つの州ずつ、「本来の新羅領」「旧百済領」「旧高句麗領」に配分したためです。後で見る「日本語と類似する地名(永く「高句麗語」であるかのように理解されてきました)」は中国東北部から朝鮮半島最南端部まで分布しているので、「高句麗地名」というのはあくまでカッコつけて使用するべきです。

8世紀に至る当時、中国はもちろん、朝鮮半島、日本列島には、漢字以外の文字が存在しませんでした。

中国語話者が外国語の人名・地名を表記する時、

現地音に似た発音の漢字を宛てる「音訳」と、言語の意味を理解して中国語に翻訳する「義訳」があります。現代中国語の「華盛頓 Washington」「紐約 New York」などは「音訳」、「氷島 Iceland」「牛津 Oxford」などは「義訳」です。

朝鮮半島では6世紀、日本列島では7世紀までに漢字を音読みの他に「訓読み」する習慣が成立しました。日本でも「kamo」という地名を「加茂～賀茂～鴨」のように表記しますが最後の「鴨」はたまたま日本語で鳥類の「鴨 中国語音は *ap(現代中国語音は yā)」を「カモ」と言ったので、宛字をするわけですが、これは「新羅地名」ですが、それまで「推火」と表記されてきた地名が、「改正」で「密城」になりました。これらは共に古代韓国語で *mirper と読まれます。韓国語で「推す」ことを mir- といい、また「密」の漢字音は mir です。「城」は「火」と同音で *per でした。「鴨 = 加茂」「密 = 推」がなぜそう読まれるのかは、中国語ネイティブにはさっぱり分かりません。それぞれ、日本語の音訓、韓国語の音訓だからです。なお、「城」を表す *per は、その後廃語となり、saur(都)、koir(郡)の第2音節に化石的に残っています。現代韓国語で「郡」を意味する koir は、古代新羅韓国語 *kæper の子孫(反照形と言います)ですが、同じ語の百済韓国語形 *kæpuri は上代日本語に借用されて「こほり」となりました。ですから、ソウルの「ウル」と郡山の「おり」は、古代韓国語の同じ語の反照形になります。

もし、地名改正の表記が漢字の字音と韓国語の訓のみからなっているとしたら、統一新羅時代には8世紀の日本列島のように現代の自国語に繋がる語からなる地名だけが存在したことになります。

ところが、三国史記地名のうち、特に旧「高句麗地名」地域に、恰も日本語の音訓のような地名が集中して見られるとされてきました。『三国史記』地名に関して言えばそうなのですが、更に古い資料や『日本書紀』などを含めると朝鮮半島全体に大陸倭語は分布しています。「高句麗地名」の大陸倭語要素を見ましょう。

「密 = 三 *mir」「于次 = 五 *yŋ」「七 = 難隱 *nanən」「十 = 徳 *tək」「烏斯含 = 兔 *usjekam」などが、8世紀日本語の「三 mi」「五 itu」「七 nana」「十 tō」「兔 usagi」などと酷似していることは古くから知られてい

ました。

これらを「高句麗語」と看做して、「日本語＝高句麗語同系説」が提唱されたり、「高句麗地名」の韓国語要素から「高句麗語＝韓国語同系説」を強く主張する研究などがありました。

私が、新たに試みたのは、①日本語に類似する地名と韓国語に類似する地名を、朝鮮半島の地図上に表示すること、②757年に新羅官吏として、「その音訓を理解して」地名改正を行えた民族が何語話者であったかを文献資料から消去法で特定したことです。

「その音訓を理解して」という点が重要です。明治政府が北海道に漢字表記の地名をつけていったとき、アイヌ語の「音」は留めましたが、その意味は全く理解されず音訳のみをしました。例えば、北海道の士別市と標津町は同じアイヌ語である *si-pet* に日本語の漢字を勝手に宛てただけで「本当の川」「大きな川」というアイヌ語の意味は生かされません。もしもアイヌ民族が漢字を早くから使いこなしていたら「真川」や「大川」と書いて「シベツ」と訓ませていたでしょ

う。つまり、音訓二重表記ができる人材とは、①その言語が古くから漢字の音訓を使用し、②かつその言語を話す、理解する話者である場合に限られるのです。

以上のようなことから、次には具体的にその分布と単語を見ていきましょう。

その前に、漢字で表記された地名をどう読むか、これは主に音読みを利用します。ただ、現代韓国漢字音や日本漢字音、現代中国漢字音で読んでも意味がありません。4世紀ごろまで朝鮮半島で使われていた「古韓音」で音形を復元します。古韓音は声調の実際の高さも含め、かなり研究が進んでいます。このため、三国史記地名から復元された単語の語形の声調(アクセント)を古代日本語の声調(アクセント)と詳細に比較することも可能になります。

では具体的に見ていきましょう。

「三国史記」地名中、古代韓国語と大陸倭語の分布

いわゆる「高句麗地名」及び新羅地名は、古代韓国語で説明可能なもの、大陸倭語と看做されるもの、及び「不明」に分類されます。次の地図で「不明」を示さなかったのは、それらのうち、かなりの部分が、古代韓国語もしくは大陸倭語で説明し得る可能性をまだ残しているからです。

大陸倭語は「●」で、古代韓国語は「☆」で表示されます。なお、中国東北部の3地点は、具体的な場所は不明です。地図作製は黒澤朋子さん(早稲田大学講師)にお願いしました。

これを見ると、757年に改正された二重表記地名から分かる古代韓国語と大陸倭語が、モザイク状に分布していることが分かります。

もともと、古代韓国語は主に朝鮮半島南部に分布していたと理解されてきました。「高句麗語」を「韓国語」だと主張する学者は「高句麗人も韓国人だった」と考え、韓国ではこの考えが優勢なのですが、いずれにせよ、8世



紀の時点で、新羅官吏が理解し得た古代韓国語と大陸倭語が朝鮮半島全体で混在していたことは間違いありません。

以上は伊藤英人(2019)『『高句麗地名』中の倭語と韓語』『専修人文論集』105号及び上記三省堂の書籍で公開した地図ですが、その後、さらに時代を遡って、3世紀文献資料、6世紀金石文資料、『日本書紀』などの8世紀日本資料の分析を通して、大陸倭語のみの分布を示したものが、次の地図です。

●は『三国史記』地名、□は、3世紀『魏書』「東夷伝」の「牟盧:mura HL 村」、▣は、6世紀出土資料等の「牟羅:mura HL 村」、■は、6世紀出土資料等の「斯麻:sjema LL 島」です。

なお「H」はhighで高い声調、「L」はlowで低い声調、他に「F」(falling) 下降声調、「R」(rising) 上昇声調を表す記号が使われます。あとで述べるように、倭語は声調言語でしたので、このような記号を以下、用います。この地図も黒澤朋子さんにお作りいただきました。

これは伊藤英人(2021a)「濊倭同系論」古代文字資料館『KOTONOHA』第224号で公開したものです。

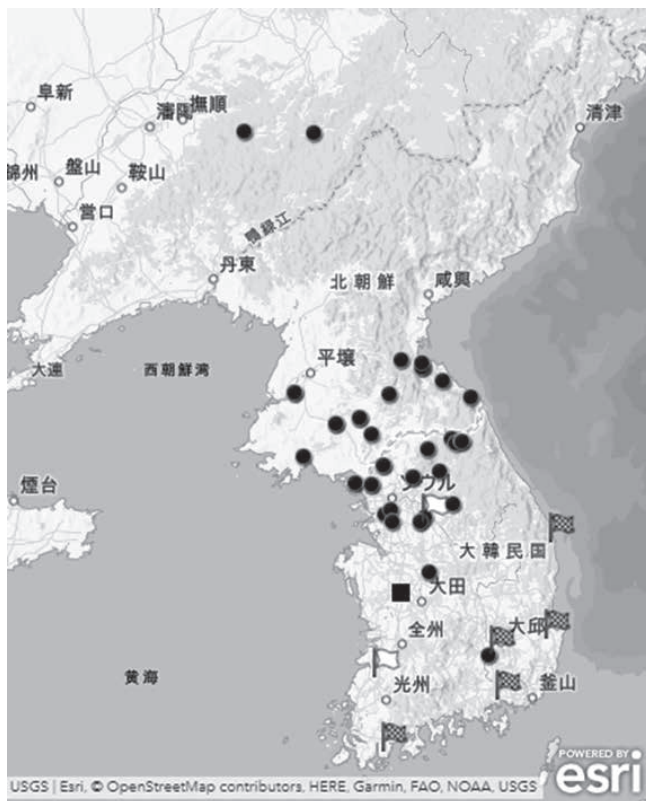
これを見ると、大陸倭語が北は中国東北部から朝鮮半島最南端に至る広い地域にまんべんなく分布していたことが分かります。

具体的な語形を見る前に、大陸倭語の話し手の正体は一体どのような人々だったのかについてお話します。

古代朝鮮半島の諸民族

古代朝鮮半島は多言語・多民族地域でした。大陸から突き出た半島(及び先の列島)には、大陸から吹き溜ったいろいろな言語集団が存在するのが本来の姿です。

中国東北部を含まない朝鮮半島で、民族集団として人名と共に、最も早くその姿を見せるのは濊(わい)と呼ばれる民族です。今の朝鮮半島東北部で紀元前128年に濊人の首領「南閩」が28万人を率いて漢に投降し、漢は「蒼海郡」を設置します。実は、『史



記』に見える、張良が紀元前218年に、始皇帝暗殺のために「力士」を紹介してもらうためにはるばる訪ねて行った「蒼海君」というのが、「南閩」と同じ濊の首領であったと考えられています。さらに遡って『逸周書』という成立年代のかなり古い史書に、紀元前1023年に殷周革命を祝して濊人がオットセイかアザラシの皮を持って周の都に朝貢に来たという記録があり、1世紀の資料である『説文解字』には濊の特産品である水産物加工品の名前がたくさん出てきます。その他多くの資料に濊人が朝鮮半島産の水産物や皮革を中国に流通させていた事実が記されています。殷周革命に際して、新しい権力者に朝貢に行ったということは、それ以前の殷代からの流通路の既得権の保障を願ったと見るべきであって、つまり濊人は殷代(紀元前15世紀～)以来、朝鮮半島東海岸の産物の中国への物流に係っていたと考えられます。

中国地名の分布から、濊人はもともと中国沿海に居住し、水田農耕と水田漁業、畑作を行いつつ、水産物や皮革製品加工及び物流に大きくかかわった「水の民」(海民・内陸水系民)であり、全羅南道の馬韓残余勢力と倭との交通にもかかわったと考えられま

す。濊人の活動については、伊藤英人(2021a,b)をご参照下さい。

この濊人の言語が、すなわち大陸倭語であると考えられます。

では、「韓」はどうでしょうか。「韓」の初出は紀元前2世紀の衛氏朝鮮の人名です。韓氏は、箕子を先祖として祀る中国系集団だったと考えられていますが、1世紀以降、古代韓国語話者は自分たちの民族名称として「韓」を採用します。

登場は濊人に遅れますが、韓人こそが濊人に先立つ朝鮮半島の先住民族であったと考えられます。それは、言語学的に見て、韓国語が古代以来一貫して、整然とした膠着語的構造を維持しているのに対し、濊語(=日本語)の方は、本来の中国語型の孤立語的性格を、韓国語型に変容させた痕跡がいたるところに見えることから伺われます。すなわち、濊人は優勢言語である韓国語とのバイリンガルになることで大きくその構造を変化させたのに対して、その逆はなかったと考えられるからです。また、水田適地や生産性の高い土地は韓国語話者が抑え、後に国家を形成した新羅や伽耶、百濟(王族は別言語だったが民衆は古代韓国語を使用していたと考えられています)がみな韓国語話者だったこと、濊人は江原道や咸鏡道、全羅南道沿海部など、あまり豊かでない土地に居住し、海運や流通にも活路を見出していたことからもうかがい知れます。あるいは、ジェームス・スコット流に言えば「ゾミア」中沢新一流に言えば「海のゾミア」、つまり、文字以前の濊人は、戦略的に周縁的であることを選んだ、と見ることも可能です。

朝鮮半島には他に百濟王族語、高句麗語などがありました。百濟王族語は数個の単語が知られるだけです。高句麗は、もちろん多言語国家でしたが、王族の言語は濊語に近い言語であったのではないかと考えられます。咸鏡道の沃沮(よくそ)語は濊語と同じだったと考えられます。済州島にかつて存在した耽羅(たんら)語の正体は不明です。朝鮮半島は、その後、中世以降は、咸鏡道の女真語地域を除いて、韓国語一色の世界になってしまいました。

先に結論を言いますと、紀元前900年ごろ、それまで数百年にわたる韓国語との言語接触を通して、文法的に韓国語化した濊語の話者たちが、朝鮮半

島南部での水田適地の不足から、文法的に韓国語化したその言語及び水田農耕と共に、九州に渡り、その後の日本列島に、人口増加や言語同化と共に拡散して成立したのが、日本語であった、と考えられます。朝鮮半島に残った濊人は統一新羅時代には「靺鞨国民」と称されました。靺鞨国民系の新羅官吏が地名改正の濊語の音訓表記に係ったと考えられます。

文法だけ優勢言語に影響されて、語順や助詞の使用が変化し、単語は本来のものを残すなどということがあるのかと思われるかも知れませんが、そうしたことは世界中で見られます。スリランカに連れてこられたマレー人は300年ほどの間に、単語は元のマレー語のまま、前置詞を名詞の後に置く助詞に変え、語順まで完全にタミル語化してしまいました。中国青海省に住む五屯人の言語は、単語は中国語のまま、語順は完全にチベット語化して声調も失ってしまいました。この問題には、最後まで触れます。

韓人と濊人のリテラシー

大陸倭語話者(濊人)が日本列島に移動、拡散してからずっと後、約800年後のことですが、紀元前2世紀末～紀元前1世紀に、朝鮮半島は漢字・漢語の使用を開始します。漢の内地となった黄海道以北地域では、毎年精密な戸籍が作成され、それらの作成には楽浪郡の「現地人」が参加していたことが分かっています。平壤貞柏洞364号墳は棺の形式から、被葬者が中国系でない、現地系の官吏の墓であることが判明していますが、そこからは紀元前45年の戸籍(前年度との差が1の位まで記述されている)のコピーと、世界で2番目に古い『論語』の竹簡が出土しています。『論語』竹簡からは、中国内地では見られない、句読や分節符が見られ、早稲田大学の李成市先生は、現地の中国語非母語話者が『論語』の読み書きを学習した例と推定しています。

楽浪郡(現平壤市)で活動が資料的に確認される非中国系の原住民は濊人のみですが、書者が韓人であった可能性も否定できません。

朝鮮半島で、最も早く中国化(加々美光行「中国の民族問題」岩波書店の用語を借りれば「漢化」です。日本や韓国、ベトナムのように、漢字漢文は受け入れても、中国語とは別の民族言語を

保った人びととなること)したのは、濊人でした。上述の、紀元前128年に漢に投降した濊人の首領が「南閩」という中国式の姓名を名乗っていたこと、その後も大半の濊人名が中国式であること、3～4世紀の江原道の濊人が「濊貉 わいばく」という呼称に含まれる「貉」の字を嫌って「東濊」と改称した事実、3世紀の濊人が天文に通じ、同姓不婚の習俗を持っていたこと、同時期の濊人が、「民」と呼ばれた中国系住民と同様のリテラシーをもって「民」として遇された事実等がそれを傍証します。「民」は戸籍に登録され、納税証明(木牘の半面を削ったようなもの)の発給を受け、市場参入権を持つ代わりに租庸調の責務を負った人々です。

韓人が国家運営のために、漢字を使用するのは三国時代新羅の6世紀からですが、1世紀に「韓」を民族名称に選択した事実が、慶州盆地のような僻地でない、楽浪郡、帯方郡以南や洛東江流域に居住する韓人が、箕子を祖先とするという文明意識を有していたことから、濊人同様、かなり早くから漢字に慣れ親しんでいたことの何よりの傍証になると考えられます。中国周辺民族で「韓」のような「好字」を自称した民族は他にありません。みんなケモノ篇、虫偏、ムジナ篇などの「貶義字」で名づけられています。朝鮮半島最南端の昌原からは紀元前1世紀の筆が出土しています。

なぜここで朝鮮半島先住民のリテラシーの話をするかという点、「高句麗地名」が、高句麗による名づけでなく、三国時代までに現地の韓人、濊人による漢字表記を得ていたと考えられるからです。

先ほど「高句麗」を「朝鮮半島の諸民族」と言いましたが、彼らは本来、中国東北部におり、朝鮮半島への南下は4世紀、半島中部への進出は5世紀からです。高句麗王権の文字使用は5世紀からですから、「高句麗地名」は、先進地帯である朝鮮半島の原住民の命名と宛字を踏襲したと見るべく、「高句麗地名」を、高句麗が命名し直して漢字表記をしたと考えるより、旧名を踏襲したと考える方が自然だからです。

さて、以下では、実際に個々の単語の再建、日本列島の日本語との比較から「倭祖語」再建、及びそこからの音韻変化の様相を見てみましょう。

大陸倭語の例

以下では伊藤英人(2019,2020,2021a,b)で述べた大陸倭語(濊語)の再建形とそこから遡った「倭祖語 Proto-Japonic」の再建形、そこから8世紀日本語と平安時代日本語への音韻変化の仮説を示します。1段目は「再建の元となる音仮名表記:*再建形」、2段目は倭祖語から大陸倭語への音韻変化、3段目は奈良時代日本語>平安時代日本語の順になっています。平安時代日本語の声調(アクセント)は資料に記録された声点に拠るもので、大陸倭語の声調は基本的に古韓音に基づいて再建してあります。

個々の音韻変化の理由(同化、語音消失、語音転換、破擦音化等々)の詳細は省略しますが、ご質問下さればお答えします。

「三み」

「密:*mir L ~ H」

*mir 倭祖語 > *mir L ~ H
> mi > mi H

「五いつ」

「于次:*yɸ L」

*itu 倭祖語 > *itju > *iɸu > *yɸ L
> itu > itu LL

「七重ななへ」

「難隠別:*nanənper LHL」

*ninanper 倭祖語 > *nanənper LHL
> nanafɛ > nanafe LLH

「十:と」

「徳:*tək L ~ H」

*tək 倭祖語 > *tək L ~ H
> *tə > to H

「兔をさぎへうさぎ」

「烏斯含:*usjekam LLL」

*wosikam 倭祖語 > *usjekam LLL
> *wosamki 列島倭祖語 >
wosagi ~ usagi > usagi LHH

「心ころ」

「居戸:*kər L」

*kəkərə 倭祖語 > *kər L
> kəkərə > kokoro LLH

「木こ-〜き」

「斤戸〜盼:*ker L」

*kər 倭祖語 > *ker
> *kəj > kə〜ki > ko〜ki L

「谷たに」

「呑〜頓:*tən L」

*tani〜təni 倭祖語 > *tan H〜* tən L
> tani > tani LL

「水:み」

「買:*me L〜H」

*me 倭祖語 > *me L〜H
> *me > mi > mi H

「鉛:なまり」

「乃勿 *namər HL」

*namari 倭祖語 > *namər HL
> namari > namari HHL

「口:くち」

「忽次〜古次 *kurtʃi HH〜*kuʃi HH」

*kurti 倭祖語 > *kurtʃi HH〜*kuʃi HH
> kuti > kuti HH

「穴:かひ(峽)」

「甲比*kapi HH〜LH」

*kapi 倭祖語 > *kapi HH〜LH
> kafi > kafi HH

「深:ふか」

「伏 *puk- L〜H」

*puka 倭祖語 > *puk- L〜H
> fuka > fuka LL

「入:いる」

「伊:*i- H」

*ir- 倭祖語 > *i- H
> ir- > ir- H

「蒜:みら(葷)」

「買戸 *mer H」

*mera 倭祖語 > *,mer L〜H
> mira > mira LL

「首:つの(牛首)」

「次若 *ʃinjak HL〜HH」

*tunjuk > *ʃinjak HL〜HH
> *tunak > *tunau > tuno > tuno LL

「池:なみ(波)」

「内米 *nami HH」

*nami 倭祖語 > *nami HH
> nami > nami LL

「首」と「角」、「池」と「波」は語義の差が大きく、特に後者は平安アクセント(高起か低起か)とも一致せず、再考の余地があります。これは、歴史民俗学的な話になりますが、「牛首」は「牛頭」との名もあります。『日本書紀』の一書(あるふみ)に、高天原追放後の素戔鳴尊が、新羅の曾尸茂梨(そしもり)に天下ったが、自分はこの国にいたくないと言って日本に渡ったという伝承が記されています。「そしもり」には、古代韓国語で「牛の山」「牛の頭」あるいは「金の山」などと解釈されてきましたが、スサノオは後に牛頭天王と習合します。偶然の一致かも知れませんが、「牛頭」との関係を想起させます。また、「池」は、類似した語形がツングース諸語では「海」を表し、「池〜海〜波」のような水関連の語であった可能性があります。

3世紀から6世紀資料等に現れる次の2語は古韓音・伝来字音ともに平安アクセントの高起・低起と一致します。

「島:しま」

「斯麻:*sjema LL」

*sima 倭祖語 > *sjema LL

> sima > sima LL

「村:むら」

「牟盧～牟羅 *mura HL」

*mura > *mura HL

> mura > mura HL

韓倭言語接触

古代韓国語と大陸倭語は、大陸倭語話者の一部が日本列島に移り住むまでにすでに数百年、新羅滅亡と共に大陸倭語が消滅するまでを含めれば千数百年の長きにわたって、朝鮮半島で「モザイク状」に接触してきました。有名な「広開土王碑文」には「韓」と「濊＝大陸倭語話者」が一つの村に住んでいたとの記述もあります。

日本語と韓国語の文法的類似は朝鮮半島における言語接触の結果であると思われませんが、まず、お互いの借用語の遣り取りについて見てみましょう。

日本語のやまとことばと韓国語の固有語のうち、語形が類似しているものを、伊藤英人(2023)「韓倭関係語探源」古代文字資料館『KOTONOHA』248号で「関係語」と呼びました。

関係語には①古代韓国語から大陸倭語に借用された語、②大陸倭語から古代韓国語に借用された語、③「放浪語」もしくは先住民語、④借用関係が不明なものが含まれます。

①韓語から倭語への借用

「畑 *patəh」「徴 pat-」「串 *kuts」「苧 *musi」「鶴 *tyrym」「媼 *sei ～ *sen」

「身 mum」「葵 *apuk ～ *apup」「束 *tapar」「稗、稲 *pie ～ *piə」「為 hjə」

②倭語から韓語への借用

「木、株 *kər」「島 *sima」「瓜 *uri」「梁、門 *tor ～ *tur」「雲、晦、暮 *kur-」

「蟹 *kane」

③放浪語等

「熊 *Kwəm」「鯨 *kudadi」「口、顎 *akyr」

④不明

「沼 *nun」「賺 *suk-」「朝 at-」「釜 *kama」「和、柔、

親 *nik-」「子 *kə ～ *ko」

「日 *ka ～ *ko ～ *həi」

詳しくは、上記伊藤英人(2023)をご覧くださいければ幸いです。借用関係の判断には、①「単語家族」の根の張り方、②アクセントなどを用います。

全てを説明する紙幅はないので、いくつか例を挙げてみましょう。

韓国語では「平面状の物体」「平面状のもの(掌など)を前に出して捧げたり、受け取ったり、追突する動作」を語根√pat-で言い表します。「√」は「語根」であることを示す記号です。次のような例があります。

*pat-ah > patah (海面、海) > pata (바다 海)

*pat-aŋ > pataŋ (底、場) cf. sonspataŋ (손바닥 掌)

*pat-ak > patak (底、床) > patak (바닥 床)

*pat-əh > pat^h (島) > pat^h (밭 島)

*pat- > pat- > pat- (受け取る) > pat-ta (받다 受け取る)

-ah, -aŋ, -ak, -əhなどは語根から名詞を派生させる接尾辞です。日本語では本来「畑」を表す語は*pari ～ *paru(墾)であったと考えられていて、「はた *pata」は古代韓国語 *pat^hの借用であると考えられます。韓国語には上のような「単語家族」が多くありますが、日本語の「はた」にはありません。最後に余計な母音-aが付いているのも、「相模」の「さが」などと同じく大陸言語を日本語が借用する際の癖です。一方、本来の「畑」を意味する語は日本語語根√par-(ひらく)の派生で、「原 はら(開けたところ)」「新墾にひはり」「ハル(沖縄語の「畑」)など多くの単語家族を持っています。

8世紀の日本語で「徴収する」ことを「はたる」と言いましたが、これも韓国語 *pat-からの借用語であると考えられます。

反対に倭語から韓語に借用された語の例を見てみましょう。

現代韓国語で「島」をsə:mと言います。この単語には韓国語内部に単語家族は見当たりません。この語は古代韓国語から次のような音韻変化を経てきました。

*sjema LL > *sjəma LH > sjə:m R > sə:m

母音推移 語末音消失・代償延長

この古代韓国語形は、先に見たように、8世紀大陸倭語と同じ形です。つまり、倭語から韓国語に借用された語であると考えられます。まず、声調が一致します。日本語の「しま」は「しむ(占める)」「しめ(標:神の宿りであるとか、自分の所有であるとかを示すため、あるいは道しるべのための標識)」、複合語の「しめの(標野)」「しめなは(注連縄)」などの単語家族群を持ちます。「しま」も「島嶼」のみならず、「囲われた集落や林泉」の意味をもち、現代日本語の「やくぎのシマ」は、「占有」という原義を今に保っています。

同じように「木」について見ましょう。古代韓国語で「木」は *namək と言い、日本語とは全く異なります。一方、15世紀の韓国語で「木の切り株」を kirih LL と言い、現代韓国語の同義語 kiru(키루)に繋がります。kirih LLの古代韓国語形を再建すると *kereh になります。

先ほど、8世紀大陸倭語の「木」を *ker と再建しました。「株」はこの倭語を借用し、「畑」のところで見たような派生接尾辞 [-eh] をつけたものであると考えられます。語形も声調も一致します。

「放浪語 Wanderwort」の例を見ましょう。放浪語とは語族の壁を越えて多くの言語に広まった単語のことを言います。100年以上前から言及されてきた有名な例として「蜜」があります。インドヨーロッパ祖語の *médʰu から英語の mead(蜂蜜酒)、中国語の「蜜」とその借用語である日本語の「みつ」のようにユーラシアの西端から東端の島まで伝わった放浪語です。

「熊」を意味する古代韓国語は *kuma LL で平安時代日本語の kuma LL と同形です。古代韓国語から現代韓国語への変化は次の通りです。

*kuma LL > koma LH > kom R > ko:m

母音推移 語末母音消失・代償延長

これらは「熊」の上古中国語形を含めて、*Kwəm と再建した東ユーラシアの放浪語の反照であると考

えられます。旧石器時代以来、人類と共棲し、「檀君神話」に見られるように象徴性の高いこの動物の名が放浪語であることはあり得ることだと思えます。

倭語の韓国語型文法への変化

日本語と韓国語のタイプ(類型論的)な差異については

伊藤英人(2009)「類型論及び言語接触の観点から見た韓国語と日本語」伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所編

<http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/recordID/handle/10108/68123?hit=-1&caller=xc-search>

以来、その後の諸拙論でずっと関心をもって論じてまいりました。

一言でいうと、日本語は、本来、中国語のような孤立語タイプ、すなわち、単語が活用せず、ぶつぶつと単語を並べるだけの孤立語型の声調言語で、韓国語との接触を通じて「韓国語化」したというのがその趣旨です。

一つだけ例を挙げると、日本語の形容詞は本来、名詞でした。「あか」「たか」などはそれ自体で「赤」「高」などの名詞～形容詞的な自立語として存在しました。韓国語では形容詞は古代以来、一貫して動詞の一種で、過去形や推量形などの「活用」をします。日本語は、何とかして形容詞を動詞化するために「あり(有)」を借りて、日本語派では副詞形語尾「く」+「ある」、琉球語派沖縄語では名詞化語尾「さ」+「あり」によって、活用を獲得しました。例:「たかく+あり+たる>たかかった」、「きよらさ+あり+m>ちゅらさん(きれいだ)」。しかし、日本語本来の形容詞語根の名詞性は現代語にも強く残り、複合名詞では「古本」「赤信号」のような語根結合の方が優勢です。何よりも、現代日本語でも形容詞語根だけで述語になることができます。「おお、こわ(怖)」「ああ、さむ(寒)」などの語根で、韓国語で、*ia musəp! *으아 무섭! とか *aiko, cʰup! *아이고 춥! ということはできません(現代語の文の頭の「*」は「非文」すなわちあり得ない発話を意味します)。

現代でも日本語の形容詞文は発育不良です。「とても面白かったです」「おいしかったです」などの形容詞丁寧形過去形は、話し言葉では十分に自然で

すが、書き言葉で重ねて使用すると、まるで小学生の作文のような「舌足らず」さを感じさせます。

日本語の形容詞や動詞の活用も、古代韓国語「為」を意味する *haj ~ *hja ~ *si を借りて、成立したと考えられます。詳しくは伊藤英人(2023)をご覧ください。

倭語の韓国語へ文法的同化については以下の「嘶」をご覧ください。これは23年度秋の「地域研究アジア」の参考資料として使う予定のものです。

なるべく、受講生の学生さんたちに分かってもらうように、授業のまとめを「嘶」にしようと思っています。歴史言語学のようにストーリーのあるものは「嘶」にしやすいのですが、言語理論のような抽象的なものは難しいですね。修行が足りません。今後の課題です。

なお、講義で私の仮説を中心に紹介するのはこの回のみで、今までの日本語起源説の流れを紹介した上でのことですので、その点をご安心ください。そのことをお含み頂いた上で、では、嘶をお聞きくださいませ。

2023年度後期(秋学期)「地域研究アジア」参考資料

狐のしっぽ

伊藤英人

よく狐が人に化けるなんぞと申します。木の葉かなんかを頭に載っけて、美女に化けたりするそうなんです。... 柳家小さん師匠の「王子の狐」は化けかけの狐を、逆にだまくらかして、扇屋で飽食する嘶なんですな。ですから、狐にも熟達、未熟の差があったということなんでしょう。

日本語、あたしは倭語と申しますが、もともとは、中国語みたいに、単語をただ並べるだけの、単純な言語だったんですな。数千年まえに、中国の沿岸にいました。

それが、のこの朝鮮半島にやってきたのが、今から3500年まえくらいのこってす。そのころ朝鮮半島には、今の韓国語の先祖を話す人たちが大勢棲んでいて、ちょっとぼかし、暮らしの仕方がちごうごぎいました。韓国語の人たちは、雑穀畑作や水田をやっていた。日本語の先祖を話す人たちも、水田は知っていたんだけど、いい土地は韓国語の人らが取っちゃったもんだから、東海岸では畑地を主にし

てたんですが、でも半島の南部では水田を作ったりしてました。中国にいた時分に、習い覚えた鯔の味が忘れられなかったもんだからね、朝鮮半島の東海岸で採れるカレイなんぞを、塩漬けにして、畑作物の粟をご飯に炊いてき、漬け込んで、今でいう、カジミシッケ(カレイのなれずし)みたいななれずしまで作って、故郷の味を懐かしんでいたわけな。

この人たち、中国から朝鮮まで来るくらいだから、遠くに行くことにためらわないわけです。だから紀元前1500年くらいから、自分たちで採った海産物加工品を、中国市場に流通させるルートを確認して輸出を始めました。海産物の魚だけじゃなくて。ラッコやアザラシの皮とかね。とにかく海や水を怖がらない人たちだった。

この人たちは、今から2900年前には、朝鮮半島最南端で、海運と水田農耕をやっていた。朝鮮半島南部は、平地が狭いのよね。土地争いが常態化して、じゃあ、いっそ、新天地を求めらかって話になったわけ。

とりあえず、先遣隊が、九州北部に行きました。そのころ、日本列島は縄文時代です。

縄文人たちは、川の中流域に住んで、狩猟、漁労、園耕的農業などをして暮らしていました。

水田農民は、ともかく、平らな、水がこぼれない、水田ができそうな土地を、鵜の目鷹の目で探しているわけよ。日本列島についたらね、河口の葦原は空き地なわけ。低湿地が必ずしも水田適地なわけじゃないけど、なに、これ、もったいない、いくらでも水田できるじゃないか、って、思った時の日本語の先祖を話す弥生系渡来人の心の叫びが「豊葦原の千五百秋の瑞穂の国!」でね。こんなの、1万年以上、川の中流域に住んで、河口の葦原を、何とも思わず打ち眺めてきた縄文人の言い草じゃあないわけですよ。

ずっと後のことですが、朝鮮半島では、漢のころ、平壤あたりに衛氏朝鮮という国ができてしまったんですな。日本語の先祖を話す人たちはこれが邪魔でしょうがなかった。紀元前128年に日本語の先祖を話す人々(識人と言います)の首長の南閻が、28万人の同族を連れて、漢に投降しました。そりゃそうでしょう、衛氏朝鮮とかいう国が、交易の通路を邪魔してたか

らね。その時、漢が設置したのが「蒼海郡」なんですよ。今の韓国で、日本海を「蒼海」と呼ぼうって言うてる人たちは、果たしてこの謂われを知ってたかどうかだね。

紀元前2世紀から313年・314年までの朝鮮半島北部(黄海道から北)は完全に中国の内地でね、植民地じゃなくて内地です。毎年、もれなく全員の戸籍が作られて、それらは日本海側の各県からぐるぐる巻きの木簡に粘土で封泥した形で、郡治(郡庁所在地)の朝鮮県(平壤市楽浪区)まで毎年送られて、郡全体の戸籍簿が作られて首都に送られた。平壤からはそうした日本海側の封泥が大量に出土しています。封泥ってというのは、簧巻き状にした木簡に粘土で封をして、政府からもらったハンコをそこに押す。郡治では乾いたその封泥をペコって外してその辺に捨てちゃう。それを集めて、中国の研究者が詳細な研究をしていますな。首都ではそれをもとに課税や賦役を算定して郡に送り返すんですね。その時の、出張者の一日の移動距離、食料配給の詳細(メニュー)まで、記録に残ってます。郡守も忙しくて、漢の会計年度は10月1日が新年度だから、9月末日まで首都に業務報告に行かなきゃなんないし、結構大変な、今とあんまし変わらない事務的日常を送っていたのね。平壤出土資料から、こうした文字行政に、日本語の先祖や韓国語の先祖を話す、いわば、朝鮮半島の二つの原住民が、参加していたことがはっきり分かっています。

朝鮮半島北半分が中国の内地だった時代は4世紀まで続きます。313年に楽浪郡が滅亡します。313年って、西の彼方、ローマ帝国では、キリスト教が公認された、ミラノ勅令の年なんですな。東西で、帝国が揺らぎだす、原因は、単純。地球寒冷化です。北の方で遊牧してた、強くて恐ろしい人たちが南下したからですよ。

で、朝鮮半島も、高句麗、新羅、百濟、伽耶という国ができて、自立の方向に向かいます。だけど、日本語の先祖を話してた濊人は国を作らなかつた。辛うじて鬱陵島にあった于山国が、刀伊に滅ぼされるまで日本語系の国家として存続してみたいですけどね。

で、話はそれより1000年以上前にもう一回戻りま

す。日本語の先祖、濊語ですけど、この言葉話す人たちは、歴史的証拠からも、紀元前1500年くらいには朝鮮半島に来てました。この人たちの言語は、どちらかというと、中国語タイプの言語だったらいい。単語をならべるだけで、活用もしない。語順も、主語-動詞-目的語、だったみたいです。

それが500年以上、韓国語の先祖を話す人たちと入り混じって住んでるうちに、なんか、韓国語っぽくなっちゃったのね。何しろ、少数派だし、新羅みたいな「国」ができた後は、支配者の言葉は韓国語だからね。濊人の村でも、外部と接触する人らはみんな韓国語も話せたはずですよ。

それに、何と言っても韓国語に魅力を感じたんでしょな。今の日本の韓国語ブームどころの騒ぎじゃない。自分たちの言語も、何とかして韓国語っぽく表現するようになっていった。濊語を韓国語っぽくしゃべる習慣が、少なくとも500年以上続いたんだと思う。その言語が2900年前に日本列島に齎されたわけですよ。

こういうことは世界中で起こってます。スリランカに移住させられたマレー人は、マレー語の単語をまるまる残して語順はタミル語化しちゃったし、青海省の五屯語は中国語の単語をまるまる残して、語順はチベット語化しちゃったしね。おんなじことが、朝鮮半島の日本語の祖先-濊語に起こったんだと思う。

例えて言うなら、韓国語という美女に、狐が何とか化けようとしたようなものです。日本列島に行って大和朝廷のような「国」ができた後も、先進文明はいつも韓国語を話す人が大陸からもたらすから、大和朝廷にも韓国語を話せる人は結構いたんだと思う。韓国語っぽい日本語の規範はずっと保たれた。これが、日本語と韓国語が似ている理由だと、あたしは思っているわけです。

ただ、「お里は争えない」のよ。日本語は、きちんと丁寧に書き言葉っぽく話すと、韓国語仕様だけど、気を抜いて、ラフにしゃべると、もとの、単語を並べるだけの孤立語型に本家帰りしちゃう傾向がある。「今度はいつが休みですか」、これは韓国語仕様。「こんど、いつ、やすみ」これが本来の日本語仕様。韓国語は、助詞もあんまり省略しないし、何よりも「～だ、～です」を絶対省略しない。あたしは、日

本語と韓国語の根本的な差は、ここにあると思ってるわけです。

これから、たぶん、少なくとも3年くらいかかると思うんだけど、世界中のこういう接触変化の例を集めて、日本語におけるこの変化を研究しようと思ってます。あたし一人じゃ無理なんで、現代韓国語と日本語の対照研究をしている韓国人研究者や、15世紀韓国語が韓国人よりできる若手の日本人研究者に声をかけて、一緒にやろうって計画してます。

こういうのは名前が大事でね。「日本語の狐のしっぽ仮説」、かりにそう名前をつけました。

「韓国語が日本語に似たんじゃないくて、日本語が何かかんとかして、韓国語っぽく化けようとした」ということの証明です。

本来の日本語は、中国語みたいな、きれいな白狐。韓国美女に憧れてうまく化けた。でも悲しいかな、日本語は、王子の狐じゃないけど、まだ、しっぽがちょろちょろ見え隠れしてます。少し気を抜くと、単語だけ並べる「孤立語きつね」になっちゃう。そのへんが、狐さんの日本語が、かわいくて、たまんないとこだなってね、と、あたしは、思うんですがね。

ご清聴ありがとうございました。

参考文献

- 伊藤英人(2009)「類型論及び言語接触の観点から見た韓国語と日本語」伊藤智ゆき編『朝鮮語史研究』東京外国語大学アジア・アフリカ研究所編
<http://www-lib.tufs.ac.jp/opac/recordID/handle/10108/68123?hit=-1&caller=xc-search>
- 伊藤英人(2013)「朝鮮半島における言語接触：中国圧への対処としての対抗中国化」『語学研究所論集』18号、55-93頁
<http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/76207/1/ilr018004.pdf>
- 伊藤英人(2019)「『高句麗地名』中の倭語と韓語」『専修人文論集』105号、365-421頁
https://senshu-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=10778&item_no=1&attribute_id=32&file_no=1#:~:text=%E3%81%84%E3%82%8F%E3%82%86%E3%82%8B%E3%80%8C%E9%AB%98%E5%8F%A5%E9%BA%97%E5%9C%B0%E5%90%8D%E3%80%8D%E3%81%A8%E3%81%AF%E6%AC%A1%E3%81%AE%E3%82%88%E3%81%86%E3%81%AB%E8%BF%B0%E3%81%B9%E3%82%8B%E3%80%82
- 伊藤英人(2020)「古代朝鮮半島諸言語に関する河野六郎説の整理と濊倭同系の可能性」
長田俊樹編『日本語「起源」論の歴史と展望：日本語の起源はどのように論じられてきたか』三省堂2020:83-125
- 伊藤英人(2021a)「濊倭同系論」古代文字資料館『KOTONOHA』第224号
<https://kodaimoji.chowder.jp/>
- 伊藤英人(2021b)「朝鮮半島における言語接触と大陸倭語」日本言語学会第165回大会W3-1
https://www.ls-japan.org/modules/documents/LSJpapers/meeting/163/handouts/ws3/W-3-1_163.pdf
- 伊藤英人(2023)「韓倭関係語探源」古代文字資料館『KOTONOHA』248号
<https://kodaimoji.chowder.jp/>